



近代日本の人文学的研究(戦争と文学を中心に)

人文科学系・人文社会学領域

田中 希生

准教授 TANAKA Kio

博士(歴史学)(京都府立大学)

■研究キーワード 日本近現代史・近代思想・近代文学

■主な所属学会 京都民科歴史部会, 人文学の正午研究会, 史創研究会, 奈良女子大学史学会

■研究者総覧 <https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.644dec13801f330b520e17560c007669.html>



研究者総覧

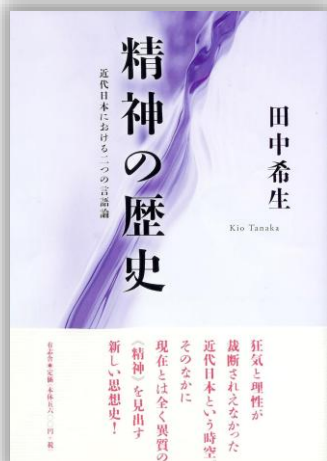
研究概要

現代科学に対して敬意をもちつつも、あくまで人文学、つまり人間の学としての歴史学にこだわって研究しています。いいかえれば、人間社会についての総合的な学問である、哲学や文学にも目配りしながら、とくに近代日本における人間精神のさまざまなありようを考察することが、自分の関心です。

具体的には、国学や儒学、蘭学にみられる人間像から出発して、啓蒙思想や自由民権思想をくぐった果てにあらわれたさまざまな社会運動や文学運動を中心に据えながら、またいくつかの対外戦争を経験するなかで、人間がどのように変化し、形作られてきたかを、主に第二次世界大戦を区切りとして研究しています。

現在の研究テーマは以下の二つです。

1. 大陸浪人
2. 純文学者の志賀直哉



アピールポイント

1. 大陸浪人

明治以降、第二次世界大戦期にいたるまで活躍した大陸浪人も、その史料の希少さや偏り、また彼らの横断的活動に起因する捉え難さから、今日にいたっても、決定的な研究がなかなか出ていないものである。もとより困難な対象ではあるが、彼らのほとんどが元武士である点に注目し、とりわけ近世以来の武士の足取りを辿ることを手掛かりに考察を進めている点は、自分の研究のオリジナリティになっている。また、ドゥルーズ&ガタリのいう「戦争機械」の一面を多分に持っており、哲学的に扱うことも興味ある点である。ある意味では、元武士たちのエートスが日本の近代化にいかなる役割を果たしたかを考察することにもつながっていて、消えゆく武士性の最後の輝きを見ることは、近代日本の戦争のありようを示しうる重要なテーマである。

2. 純文学者の志賀直哉

かつては「小説の神様」として絶賛されたことがよく知られているが、戦後は「志賀天皇」と呼ばれ、あるいは東條英機になぞらえられるなど、その絶大な影響力がかえって批判を招いて今日では数多の文豪のひとりに数え上げられる程度になった志賀直哉もまた、大陸浪人と同様の、消えゆく存在として、歴史学者が扱うにふさわしい陰影をもっている。彼もまた元武士の家系に生まれた。祖父や父の破格の経済的成功により、官軍と戦いながらもその敗北の刻印は隠されて藩閥子弟・華族子弟の通う学習院に所属して勝者たちのあいだで青少年時代を過ごすという、当時の歴史を辿るにふさわしい複雑さをもっているが、その点に注目することが、純文学者を歴史学者が語ることのオリジナリティの中心であると考えている。